〔松屋筆記百九〕髪（カヅラ）

史記衞康叔世家九丁注に、左傳を引て、莊公登城、見戎州己氏之妻髮美、髡之以爲夫人髪（カヅラ）云々、

○按ズルニ、鬘ノ事ハ器用部容飾具篇ニ詳ナリ、

〔倭訓栞前編六〕かもじ　髪の俗稱也、又長かもじあり、女房飾抄に、かもじの水引は、四十の年より二筋也といへり、

〔歴世女裝考四〕かもじの事

かもじの本名はかつらといふ、前に引たる源氏末摘花の卷に、九尺のかつら、又枕の草子に、七尺のかつらの赤く（モノカレテアカキナリ）なりたるといひしも、みなかもじなり、かづらをかもじといふは、湯卷をゆもじ、内方をうもじなどゝ片名をとりてよぶ事、東山殿比の女言なり、文字には髪と書く、和名抄に、髪和名加都良、釋名に云、髪少者所以被助其髪也とあれば、千年以上よりありし物也、又別に鬘といふは、神代には男女とも時の艸かつらを髻にかけて飾とし、又は絲にても、あるひは玉をつなぎてもかつらに玄たる事、日本紀、古事記、万葉の歌にも見へたり、委しくは本居大人が古事記傳六卷黑御鬘の解にみえたり、又かづらを中昔はえびかつらともいへり、源氏初音の卷花、ちる里のことを、御ぐしなどもいたくさかりすぎにけり、やさしきかたにあらねど、えびかつらしてぞつくろひ玉ふべきとあり、此註に、伊弉諾尊黑御髪の事によりて、かつらをえびといふといへり、又中昔は時の生花を糸につらぬき男の冠にかけし事もありて、歌などにもみえたり、かづらは西土にてもいと古し、

男子結髪風

〔歴世女裝考二〕神代の髪の風

そも〳〵神代の髪の風は、男は髻をば一ッに結て、二ッに左右へ綰（わかね）櫛もて貫きとめ、糸につなぎたる玉をまとひて飾とする事、櫛の條にいへる如く、伊邪那岐尊左右の御髪（みびんづら）に湯津々間櫛を刺